

スイカ育苗における親水性不織布を用いた 底面かん水の方法と効果

育苗床で発生するスイカ炭疽病は頭上かん水で茎葉がぬれることにより、病勢の拡大や進展が早くなります。また、無病徴感染株による被害は定植後に甚大な影響を及ぼすため、底面かん水を行う生産者が増加していますが、かん水ムラが生じやすく、苗の揃いが不安定となっています。そこで、新潟県農業総合研究所園芸研究センターでは、苗の斉一性を高める底面かん水方法を開発し、その効果を明らかにしましたので、その概要を紹介します。

☆ 技術の概要

1. 親水性不織布は一重で温床床面全体に敷設します。両端を温床枠外へ出すことにより、余分な水分が温床外へ排出されます（図1）。
2. かん水は、育苗ポット間の隙間に位置するように両側φ1mmの穴を開けた、内径20mm塩ビ管（硬質ポリ塩化ビニル管VP20）を温床中央部に設置して行います（図1）。穴の間隔は、10.5cmポットの場合は約10cm、9cmポットの場合は、9cmとします。
3. 1回のかん水量は、1ポット当たり100～200mlの水量とします。
4. ポットのずらし作業を実施しない状態でも徒長苗が少なく、苗揃いが良くなり（図2）、また、育苗ポットの鉢底穴から露出する根が生じるポット数も僅かになります。
5. 頭上かん水に比べて、スイカ炭疽病の発生が抑制されます。また、発病してもその後の病勢の進展が抑制されます。

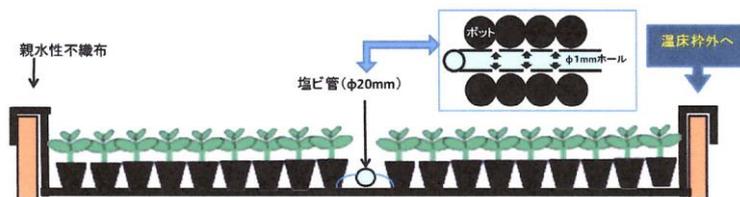


図1 親水性不織布の敷設方法とかん水位置

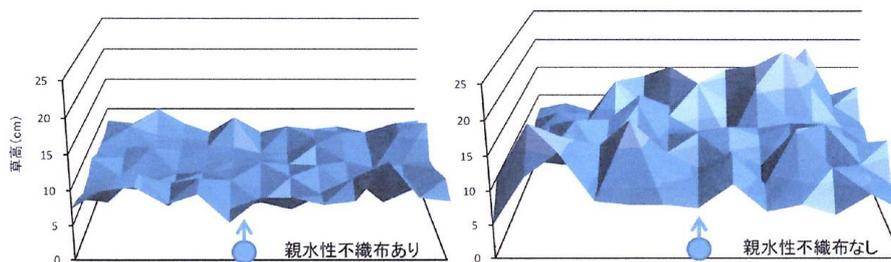


図2 無ズラシ育苗における親水性不織布による草高分布の改善効果(H30)

注1 ポット配置:縦13ポット×横10ポット 塩ビ管20mmφ穴の間隔10cm・水量100ml/10.5cmポットで実施
注2 グラフ縦軸は草高(cm)、底面は温床面を示す。また、図中●は塩ビ管の設置位置と配置方向を示す

☆ 活用面での留意点

1. 試験時のかん水の頻度は、3～5日間隔でしたが、軽い萎れ株が見えたらかん水します。
2. 育苗終期は、根鉢形成の状態を確認して、かん水量を調整します。
3. 詳しいことは、新潟県農業総合研究所園芸研究センター（TEL:0254-27-5555）までお問い合わせください。

（日本政策金融公庫農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 吉岡 宏）